

組織目標評価報告書（令和5年度）

17

部局名:

資源植物科学研究所

学域名:

—

部局長名:

平山隆志

目標・取組		目標・取組の達成状況(成果)及び新たに生じた課題等 (部局での検証とそれに対する取組)
①教育領域	関連する 中期計画の番号	教育領域における目標・取組の達成状況及び新たに生じた課題等
植物科学の基礎科学から応用、さらにデータ科学など異分野との融合まで幅広い研究の展開を企画、実施でき、国際感覚も身につけられる教育を実施する。 このため、学生や若手研究者を中心とした国際フォーラム、研究所の研究について互いに議論するアッセンブリー、国内外の突出した研究をおこなっている研究者を多数招いての植物科学シンポジウムを開催する。	(5-1)	環境生命科学研究所の博士前期課程9名、博士後期課程23名、計32名の教育を実施した。このうち22名が外国人留学生で研究所の国際性は更に向上した(10名は国費外国人留学生)。 令和5年2月に第38回資源植物科学シンポジウム及び第14回植物ストレス科学研究シンポジウムを開催、3名の外国人研究者を含む11名が最先端の研究を紹介し、活発な議論を行い、人的交流が促進された。 令和5年7月に研究所研究交流会を開催、所内での研究成果と今後の研究の方向性を皆で議論し、共有した。このような日頃の交流により、研究所として新たな要求がなされた場合での迅速な対応を可能にしている。 令和5年11月に研究所において国際フォーラムを開催した。外国人38名を含む116名が参加し加発な議論が行われた。若手教員や大学院生が中心となってこの国際フォーラムを行うことで、彼らの国際感覚がさらに育まれた。 以上のように、当研究所では、大学院教育で国際感覚を身につけることを実践する環境を提供しているが、その結果、3名の大学院生が国際学会等で発表賞を受賞している。 また、令和5年6月に、新入生を招いた昼食会を開催し、学生から研究所の教育環境について率直な意見を得た。その後、インターネット面談などに利用する個別ブースを設置するなどの環境改善に繋がった。
②研究領域	関連する 中期計画の番号	研究領域における目標・取組の達成状況及び新たに生じた課題等
ありたい未来の実現に寄与する環境頑健作物や高付加価値作物の作出を課題として、その基礎基盤の理解と、獲得された知見や資源を社会実装する研究を実施する。 このため、大学改革推進のための国際研究拠点形成プログラムの継続実施、科研費申請書の本研究独自添削の継続実施及び体制強化、次世代作物共同研究コアによる研究の継続実施、植物研究拠点アライアンスの連携強化を進め、以下の目標値を目指す。 ・科研費取得教員率:85%以上 ・論文数:95報以上 ・国際共著率:60%以上 ・Q1ジャーナル率:70%(前年比6%増)以上 ・一般企業との受託研究や共同研究:10件以上	(8-1)	岡山大学が研究大学として最重要研究領域として掲げる植物科学・農学の研究をリードする研究所として、非常に高い指標を目標に設定した。論文数では若干目標値近辺に到達していないが、他の項目でほぼ達成できたと考えている。 ・科研費取得教員率: 82.35% ・論文数: 58報(R5.12.31現在一単純計算による予測で77報) ・国際共著率: 53.4%(R5.12.31現在) ・Q1ジャーナル率: データなし ・一般企業などの受託研究や共同研究:9件 昨年に続いて紫綬褒章受章者を、金光功労賞受章者、山陽新聞学術功労賞受章者を所員から輩出した。更に、馬教授は、第一回Frontiers Planet Prize日本代表に選出された。 科研費については、件数は減少しているが受入金額は前年比で増加した。科研費採択のサポートについては、申請書の添削の強化に加え、5年以上採択できていない教員と個別に所長、副所長が面談し、対応を詳細に協議してきている。この結果、この2年で、5年以上科研費非採択の教員は5名から2名に減少した。 受託研究では、未来社会創造事業や武田科学振興財団等の大型の寄付助成金が採択された。
③社会貢献(診療を含む)領域	関連する 中期計画の番号	社会貢献(診療を含む)領域における目標・取組の達成状況及び新たに生じた課題等
地域社会との連携を強化し社会貢献に繋げる。 このため、高校生や一般市民等を対象とした研究所における体験プログラム、公開講座などを実施、一般企業と協働し保有する研究資源の積極的活用による農業生産物の改良などを進める。	(1-1)	市民向けの研究所一般公開を開催した。倉敷市が主催するくらしき農業まつりにブースを出展した。また、倉敷市が主催する市民向け公開講座に講師を派遣し講演を行った。これらの活動は研究所の認知度の向上並びに地域社会との連携強化に繋がった。に貢献した。 高校生向けのサマーサイエンススクールを実施(参加者25名)、また、随時見学者を受け入れ研究所紹介及び各研究室での研究紹介を行った(受入3回、総勢45名)。大学生・高専生向けの、サマーインターンシップを実施、日本各地から10名の学生を迎えて、4日間の研究体験プログラムを実施した。これらの活動は、環境生命自然科学研究所(植物ストレス科学講座)の大学院説明会への参加学生数の増加や、ひいては入学者の増加に繋がった(直近4年間の在籍者数:20、25、29、30名)と考えられる。 産業界との連携交流を促進した。その一環として、ヤンマーホールディングス(倉敷市)の研究所と交流会を開催した。研究所からは多数の教員、大学院生が参加し、それぞれの研究について理解を深め、共同研究の可能性が話し合われ、今後もこのような機会を継続することになった。また、サマーインターンシップの一環で、クラレくらしき研究センター所長を招待し、講演会を通じて企業の研究所の概要をうかがうとともに、同じ地域の企業と大学の研究所間での新たな連携の可能性を検討した。これらは、新たな共同研究に繋がる有益なものであったと考える。
④管理運営領域	関連する 中期計画の番号	管理運営領域における目標・取組の達成状況及び新たに生じた課題等
世代交代、女性教員増加、それに向けた組織再編、その基盤となる研究所の未来構想の構築のための環境づくりを進める。 このため、昨年度に設置した准教授会と協働し将来について考える組織による未来構想のたたき台を、本年度中にまとめる。	(11-2)	世代交代などの問題に対処するために、将来の研究所の方向性を、主に若手教員に話あってもらうためにWGを設置し、その答申を受け取った。WG作業を担当した若手教員内で、研究所の理念を確認し、現状認識のギャップを埋め、今後の課題を共有することができた。答申は教授会および准教授会で共有され、これから続く将来構想に関する全所的な議論を効果的に進めるうえで有益なものとなった。 また、将来の倉敷キャンパス施設整備について、当研究所の構想(案)作成し本部施設企画部と協議を開始した。

注1) 本様式全体が1ページに収まるよう作成してください。

注2) 自己評価による達成度(5~1)は非公表項目とし、組織目標評価結果を公表する際に消去します。